

東日本大震災 | 連続ルポ1 | 動き出す被災地

Great East Japan Earthquake | Serial Report 1 | Devastated Areas Have Just Started to Stir — no.21

通い漁業のゆくえ——石巻市河北町長面浦の漁業復興を目指して

Commuter/On-site, the Whereabouts of a Fishery

——Aiming to Revive the Fishery with Manifold Resources at Nagatsura-ura, Kahoku-cho, Ishinomaki

竹内昌義

Masayoshi Takeuchi

東北芸術工科大学教授、みかんぐみ／1962年生まれ。東京工業大学卒業。同大学大学院修士課程修了。作品に「八代の保育園」「SIBUYA-AX」ほか。共著に『団地再生計画／みかんぐみのリノベーションカタログ』『原発と建築家』『図解 エコハウス』『未来の住宅』ほか。

1998年東京建築賞奨励賞受賞ほか

資源の宝庫・長面浦

津波常襲地である浜辺の居住を認めない。昭和津波後の海嘯罹災地建築取締規則(1933.6.30)¹では高所移転が進まず、その後忘れられた、との反省からであろうか。宮城県が発した「職住分離」政策は、長大な防潮堤建設計画とともに、不安を拭えない強い印象を与える。

施策の是非はさておき、現実の「通い漁業」とはどんなものか。ここでは、筆者が大沼正寛(東北工業大学)、中島みゆき(毎日新聞社)、李仁子(東北大学・文化人類学)の各氏、および日本建築家協会宮城地域会らと取り組んできた経過、今後の課題について記しておきたい。

長面浦(ながつらうら)は、太平洋を望む追波(おっぱ)湾へ注ぐ新北上川の右岸河口にある内水面である。三陸リアス式海岸のなかでも、半島が屈曲して内海を囲む特異な立地で、太平洋の荒波から山地に守られている。浦の北の出入口は湾へとつながる一方、浦の東、南、西は粘板岩の山地であり、無数の小水系が清水を注ぐので、牡蠣の成育がめつぼう早い(図1)。当然、養殖牡蠣の導入以前から魚介の宝庫であり、古来居住地として、海路の要衝として、そして信仰の場として栄えてきた。有史以前の遺跡も多く、中世は修験者の霊場となった。



図1 | 被災前の尾崎の漁業風景 [撮影: 中島みゆき]

大川3漁村——尾崎浜・長面浜・釜谷浜

長面浦南隣の雄勝地区旧12ヶ村、そして長面浦東岸の尾崎浜、西岸の長面浜、さらに西側の釜谷浜の3漁村は、近世は一体として桃生郡十五浜と呼ばれた。釜谷浜のさらに内陸部には、針岡村、福地村が存した(図2)。

明治22(1889)年の町村制施行に伴い、雄勝12漁村は合併して十五浜村と称する一方、釜谷・長面・尾崎の3漁村は、針岡、福地の2村と合併して大川村を構成した。大川村は、明治後期より新北上川が開削される経過を考えると、陸・水両面からみて一定のまとまった地理領域でもある。すなわち大川3漁村は、近世の十五浜、近代は新北上川右岸の農漁村に属する、複眼的な文化圏域にあると言える²。

今次震災で新北上川を遡上した津波は、実に50kmに及んだと言われるが、特に甚大な被害があったのは河口に近い数kmで、その惨状は、大川小(釜谷浜)の被害を含め、各種報道のとおりである。なお、その後の当地区での聞き取り支援は、李ら(前掲)が続けている。

結果として集落の存否は、立地の違いが明暗を分けた。上流より福地村、針岡村、釜谷浜の一部(入釜谷)は、浸水や富士沼決壊による孤立などがあったものの、集



図2 | 長面浦と20km近く離れた仮設住宅／集団移転予定地 [作成: 大沼正寛]



図3 | 水没した震災後の長面地区
【撮影：中島みゆき】



図4 | 被災後・公費解体前の尾崎
【撮影：今泉俊郎】



図5 | 残されたスレート民家K家
【撮影：大沼正寛】



図6 | 埋立てから守った記念碑(現存せず)
【撮影：中島みゆき】



図7 | 長面浦漁業再生WS
【撮影：早坂亮】

落は残存した。しかし、釜谷浜と長面浜は、壊滅であった(図3)。尾崎浜は太平洋から山地に守られ、引き波の浸水は大きかったが、実は建物の倒壊はほとんどなかった(しかし、同様に災害危険区域に指定)。

なお、倒壊を免れた尾崎浜の貴重なスレート民家群が、公費解体ラッシュによってほとんど失われたことは別考を要する問題で(図4)、残された民家(図5)の保全に取り組むNPOらの動きについては、大沼ら(前掲)が調査協力、支援を行っている。

長面浦の復興と漁業を考える会

ところで、長面浦を中心とした宮城県漁協河北支所(組合員は長面と尾崎の漁業者約20名)に属する漁家の生業は、主に長面浦で行う牡蠣養殖と、外洋の刺網の二種からなる。外洋側には第1種漁港の名越漁港があり、これは現在、漁港までの陸路がほぼ絶たれた状態で、復旧を待っている。上述のように主力の牡蠣は、生育速度が他地域の倍も早く、大きく美味であるが、本格復旧はようやく途についたところである。

当該漁協でも、牡蠣処理場の復旧工事がようやく着手される運びとなったが、それに付随する漁具の保管、従事者の脱衣や休息、出荷のための環境整備、何より水道復旧の見込みがないなど、不足物は枚挙にいとまがない。

特に問題は、壊滅した長面浜はもちろん、残存した尾崎浜においても、諸事情から地区内の集団移転が叶わず、低地の一切が災害危険区域に指定されてしまったことである。旧大川村が属する石巻市河北町地区は、東端

のこの漁村を除けば内陸国であり、大川小周辺の遺体捜索に時間を要すると同時に、石巻沿岸部から参集する巨大な集団移転地の調整が第一の課題となり、漁村復興に手が回らない、といった背景があった。

漁業生産に必要な最低限のインフラ整備として、県道および電気の復旧は確実となったが、水道は、消費者の激減により、4km程西の給水地から自力でタンク輸送するという計画に留まる。食品衛生上、潤沢な水道が切望されているが、かつて村で引いた簡易水道の衛生処理が認可される見込みも、いまだ見えない。

かくして漁業者たちは、浦から20km近くも内陸にある仮設住宅から「通い漁業」を続けている。今後移転地に住んでも、この距離は変わらない。それでも「神様のいたずらみでえな豊かな浦」と自分たちの山海資源を評価する彼らは、漁業生産に邁進する。かつて、八郎潟に代表されるように干拓と水田開発が重要とされたころ「海洋は無限の宝庫なり」と、先人はこの浦の自然環境を守った(図6)。漁業者の浦への思いは並々ならぬものがある。

筆者らは、2012年後半より当該地区漁業者らとの話し合いを継続的に重ね(図7)、2013年末からの牡蠣処理施設稼働を目指して課題を話し合ってきた。石巻市河北総合支所を核とした実務者会議(2013.6.19)においても、当漁村へのなんらかの支援措置が必要であることが認知されたばかりである。ただし、広大な沈下地盤の復旧や、周辺の雄勝・北上地区を交えた巨大な集団移転地の整備調整など、課題は山積している。いわゆるトップランナーとされる漁村の動きと比べるべくもない。道のりは長く、歩みも早くはない。高齢化も進んでいる。

しかし、われわれ支援グループを含め、現場は悲観的でもない。若干ながら、若手も育ちつつある。そして何より、浦の山海資源が待っている。自然に翻弄されたとはいえ、もう一度、自然環境に寄り添うらしと生産に立ち返る。それが、この地の姿であろう。通い漁業のゆくえを見守りつつ、今後の動きを支援していきたい。

注

- 『建築雑誌』2012年12月号、特集「復興のアポリア」
- 大沼正寛「天然スレート民家が語る三陸漁村の地域文脈」(2013年度日本建築学会大会農村計画部門研究懇談会資料「集落に根ざす住まいの再建」)